

(課外プロジェクト名)

伝えよう一番〇〇なこと～日本×カンボジア our stories～

1. 組織

代表 学校教育学部 4年 笠原健志
学校教育学部 4年 岡田陽南
学校教育学部 3年 大橋和歩
学校教育学部 3年 三浦沙耶
学校教育学部 3年 猪谷千佳
学校教育学部 2年 小川杏華
学校教育学部 2年 中村春陽
学校教育学部 1年 上田楓人
学校教育学部 1年 小宮ひびき
大学院小学校教員養成特別コース 1年 荻原悠介

2. プロジェクトの概要

グローバル化が進む現代において、日本でも英語が教科化されるなど、子どもたちの異文化に対する理解をより深めなければならないのではないかと感じる。文化も住んでいる環境も違う世界各国の子どもたちが、少しでも様々な国の人々にふれ、感じ、私たちの当たり前がどうではないこと、多種多様な人が存在し、コミュニケーションをとる手段も様々な方法があるのだと知ってほしいという想いから今回のプロジェクトを企画した。

「伝えよう一番〇〇なこと～日本×カンボジア our stories～」では、子どもたちの一番頑張っていること頑張ったことをカンボジアと日本の子どもたちに絵とエピソードで相互に発信することで、それぞれの国に興味をもち、子どもたちの日常会話や日常生活にカンボジアや日本が入り込むことを目標とした。また、一枚のワークシートに両国の子どもたちが絵とエピソードを書き、ワークシートをやり取りするような形で行った。これは、子どもたちが1対1のやり取りを通して、繋がりを感じることができるのではないかという考えから、このような手段を選んだ。

3. プロジェクトの計画及び活動詳細

(1) プロジェクトの詳細

今回のプロジェクトは、私たちがカンボジアと日本の子どもたちの架け橋となって、一番頑張ったこと・頑張りたいことが書かれたワークシートを両国の小学校に持っていき、全4時間の授業をするというものである。7月に西脇市s小学校の6年生に1回45分の授業を2コマ行い、そこでは、カンボジアの歴史や、生活の様子を写真が動画を使って説明し、なぜ伝えるのかを子どもたちに理解してもらったうえで、ワークシートに絵とエピソードを書いてもらった。9月にカンボジアのコンシェイム村とスレイン村の小学校でそれぞれ1時間分の授業を行った。カンボジアでは、〇×ゲームをしながら日本とはどんな国なのか知ってもらい、日本の子どもたちから預かったワークシートの概要を説明して、日本同様にカンボジアの子どもたちにも頑張ったこと・頑張っていることを書いてもらった。そして、12月に7月と同じ小学校で1コマの授業を行った。ワークシートを返し、そのワークシートからどんなことが分かる

のかを子どもたちで分析し、それぞれの一番の想いをやり取りする楽しさなどを感じてもらった。

(2) 活動詳細

① 国内での国際理解教育出前授業の実施に関して～前半編～

7月に西脇市s小学校の6年生に対して、総合的な学習の時間にゲストティーチャーとして授業を行った。今回は、1コマ45分の授業を2時間連続で行わせていただいた。

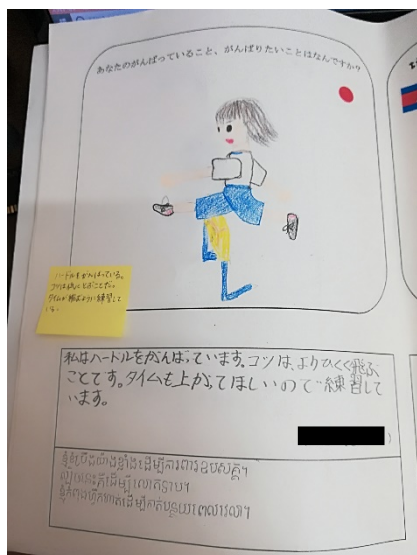
一時間目は、モイ・ピー・バイゲーム(1・2・3ゲーム)を導入部分で行い、カンボジアの言葉にふれ、動画を見せることで、カンボジアの生活の様子を知ってもらった。



「カンボジアの子どもたちのことを知りたい」という子どもたちから出た言葉から、カンボジアを子どもたちのことを知る前に、まずは自分たちのことを紹介する必要があることに気付いてもらい、一番頑張ったこと・頑張りたいことを書く意義を子どもたち自身で理解してもらえた授業となった。

二時間目は、実際にワークシートを書くものにした。ワークシートを書く際に、ただ書くだけではなく、相手のことを考えながら、またどうすれば伝わるかを考えながら、子どもたちの一所懸命書く姿を見ることができた。「柔道を頑張っています」「ドラムを頑張っています」など、たくさんの子どもたちの頑張っていることを知ることができ、授業の終わりには、「先生！絶対カンボジアの子に届けてや！」などの発言も見られ、子どもたちの中でカンボジアの子どもたちと繋がりたいという意思を感じることもできた。

また、質問ノートも作成し、子どもたちがカンボジアに対して感じる素朴な疑問を書いてもらった。



② 国外での国際理解教育出前授業の実施に関して～カンボジア編～

8/29～9/8の11日間カンボジアに渡航し、その中の9/1と9/2の二日間、コンシェイム村とスレイン村の小学校で授業を行った。(※他の期間はアンコールワットや、日本語学校訪問などの文化研修を行った。)

日本では桜が有名であることなど、絵や〇×ゲーム、S小学校の学校案内パンフレットを使って日本の紹介を導入部分で行った。そして、日本の子どもたちが書いてくれたワークシートを届け、日本の子どもたちの想いを伝えたり、カンボジアの子どもたちの頑張っていることを知りたい理由を話したりして、総勢150人の子どもたちが、頑張ったこと・頑張っていることを書いてくれた。



授業以外の時間では、1本の縄を使ってみんなで遊ぶなど、遊びに関しても、みんなで楽しむことを意識し、意識しながら取りくんだ。

S小学校の子どもたちが学校案内パンフレットを作ってくれカンボジアの子どもたちに紹介してほしいということだったので、クメール語に訳し、紹介したところ、多くのカンボジアの子どもたちが興味をもってくれた。



渡航期間中に、日本の子どもたちが書いてくれた質問ノートを完成させるために、カンボジアの人たちに様々な取材を行い、子どもたちの疑問を解決することができた。

「カンボジアでも柔道はありますか」などの質問に対して、カンボジアの競技場に出向き、実際に柔道をやっている姿を撮影することもできた。

③ 国内での国際理解教育出前授業の実施に関して～後半編～

12月に、西脇市立s小学校の同じ6年生に対して1コマ45分の授業を1時間いただき、総合的な学習の時間として授業をさせていただくことができた。

後半の授業では、s小学校の学校案内パンフレットとワークシートが実際にカンボジアの子どもたちのもとに届く過程を画像や動画を使って見せることで、自分たちの書いたものがカンボジアに届いたことを実感してもらうことができた。そして、ワークシートとそのワークシートを書いた子どもたちの写真を返却することで、どんな子がどんな想いで書いたのかを知り、1対1の繋がりを感じることができたのではないかと考えている。実際に「女の子が書いたと思っていたのに、男の子やったんや」など子どもたちが素直に驚いていたり、絵のうまさに関心していたりする姿を見ることができた。まとめとしてカンボジアについて新しく知ったことをまとめる時間をとり、その中で、「カンボジアは最初貧乏なイメージだったけど、笑顔が多くて明るくて、考え方が少し変わった」「カンボジアにちょっと行ってみたい」というまとめや感想をしてきていた。

④ 得られた成果

今回のプロジェクトでは、カンボジアと日本の子どもたちの日常に、それぞれの国が入り込むこと、1対1の繋がりを作ることを目標として行った。日本の子どもたちの中には、「はやくカンボジアの授業してよ」と言ってくれたり、「先生ちゃんと届けてくれた？」などの言葉を多く聞いたりすることができ、これらの目標は達成できたと考えている。しかし、カンボジアの子どもたちに対しては、1時間という授業の中で、なかなか日本の子どもたちについて考える時間もとることができないまま、ワークシートを書いてもらったため、日常生活の意識にカンボジアが入り込むことは難しかったのではないかと考える。また、カンボジアでは、図工や音楽などの副教科の授業がない中で、伝える手段として絵を選択してしまい、下級生などは、頑張ったことを書くことが難しそうでもう少し工夫が必要だったのではないかと考えている。しかし、先ほども述べたように、実際に私たちがカンボジアという国に足を運び、現地の人たちに接する中で感じたものを届ける中で、カンボジアに対するイメージが変わった、少し行ってみたいなどという言葉が日本の子どもたちから聞くことができ、私たちが目指す国際理解教育に近づけたのではないかと考えている。

また、カンボジアに渡航した際、私たちの当たり前がカンボジアでは当たり前ではないことに気付いた。子どもは絵が描けることは、私たちにとって普通なことと感じていたが、実際小さいころから絵を描く習慣ないカンボジアの子どもたちにとって、困難なことで、しかも、頑張るなどといった抽象的なものを絵で表すことに関しては、もう少し試行錯誤する必要があったのではないかと感じた。今回のプロジェクトで得られた反省は、今後に活かしていきたい。

しかし私たちが実際に現地に足を運び得られた経験が子どもたちに還元されているのを見ると、これからもこの活動を続けていく意義を感じ、今回のプロジェクトに関しても、少しでも子どもたちの外国に関する固定観念を変えることができたことができた。カンボジア笑顔団体として、子どもたちと笑顔で繋がること、そこから生まれるたくさんの輪が日本とカンボジアの子どもたちを巻きこんでいるのではないかと感じる。両国の子どもたちの想いが「頑張ったこと・頑張っていること」を通して繋がることができたことは、このプロジェクトの最大の成果であると考えている。

⑤ 費用の内訳

(円)

消耗品	旅費	謝金	その他	合計
	190,000			190,000